通二篇通詁之一

特35
716

第千六百九十二號

五編亭

中澤道二翁像賛

奇才黄老儼然在林
窮理明察語道精詳
生於洛終于丞陽
著書五卷令名長香

平安卜河正揚題

道二翁道話序

子曰天地之性人為貴人之行莫大於孝と。
天地の気を受て生するゆえ中に於て。
天地の精気と受くせびるゆえ。
百骸全く。仁義禮智の性と備へて。
孝悌の至徳よりとまて。人より貴さいなし。
かゝる尊ぶべきさい。父兄父
子夫婦ほんの親族の交わりに変ずるゆえ。日
用孝悌孝悌ばかりつとめ。老く仁義

の道よりあらざるなり。されどうち去り
ゆくべき本末治法あり。其根なる時者を
を書こと にあること。語曰。君子務本。本立
而道生。孝弟也者。其爲仁之本與。故
孝行さへあらば。五倫の道
なり。さ餘日用事業倡ゆく有ふこの
ちなり。如何とぞ。ぜんぜんとして
不忠なるべい。父母乃ち安らかなるべ
ゆくべ。すべてこれ孝弟なる道

あ不仁ちんべ。父母のん安らかす。あよ
ふ仁惠を親すれば。父母のん安らかす。又夫へ妻し
ちゆく貞順あるべ。父母のん安らかず。故ま
ちゆく節操をちゆく貞順とぱ也。
夫あして妻へ義和を失ふ。ふ和合らべ。
父母のちゆくあるべ。あよ他ゆく
別義を正ちゆく。夫のそこをちゆく
ちゆく弟ちゆく敬義を失ふ。兄へ背べ。
父母のんあるべ。あふ恭敬みゆる

ゝ第の義をぼすあり。又ゝして
友愛を違ひ不和合あれば。父母のん
安ゝしむ。故ゝ兄弟を恭敬して
兄の義をつゝしむあり。又朋友のあいだ
互ひに信實を失ひ。更ゝ亟ゝまこと。
父母の心安ゝしむ。故ゝ朋友の更り
ゝ信實と敬あり。ゝ家業と怠
ゝ渡世をゝ。父母のん安ゝし。故
ゝ職業を太切ゝ。力ゝ

盡すべし。ゝれ日月あゝ一ゝ為。少ゝ
みゝとゝ生ゝ父母のん安ゝ
ゝ生語默動靜の間戰々兢々と
ゝて。唯音誠をゝ尽ゝ。孝道
全ゝす。故曰孝德之本也。一孝立而
萬善從之。あゝずや。さゝれば又人ゝ
氣質の交ゝる斧ゝず。昏明清濁
の違ゝるをゝて。学ゝ人戒私欲を厳塞
せゝ。性善と失ひ孝道と行ひ

ゆくをしあらばかは聖人ならんかなる
宜を設事。致知格物より。誠意正心
脩身なる。しもよりかはいまは
ふの中澤翁の著作とまうす神髓
老莊の語より。百家衆技狂言綺語
を交へ。縱横自在に呼吸すつ
濃く淡しくのこ。ものも。其要唯人々と
八固有の性を見得し。其性を盡さん
為に人の為の道のしんや。

翁名を義道。竜屋久兵衛と稱し。
世〻平安の人なり。享保十年乙巳
秋八月十五日。上京烏丸町一條辺に
中澤氏の家に生れ給へり。幼
少より。父と伴に職を業とし。
二十四歳の冬より。居を中筋に移せり。
遷せり。おのづからものいもうづく。
平日書よむ。いとまもなく。あれ文字を
疎ならんと。為に儒佛の教を

僧じ。家職乃ち隙をとくふ。所々の講席法筵の席に。ぞくしたり。又へ宿儒高僧の許よりいとまを道の大原と研窮すること年久しく。後我梅巖石田先生の教を仰し。手島堵菴先生より親炙して性理の蘊奥をきわめ。五十五歳の春。剃髪まつ道二し沒名し。師の許可を受て。初秋東都にいたり。みちを

うるおと。元二十余年たり。其間京師の帰注し。或ハ東国北国の赴きしたい浪花南紀乃至遠江。丹但播陽乃諸州を巡りて。教をうるおと。其間に霜雪をへる。寒暑の苦いなく。人々のふ愛。ぞと。疾とひ。故日医療の志ろ。季夏十一日にして東都三前舎

乃中ふ孫りうをまうり。寿年七十九歳
ちう。ちかぐき二十四日ゑ在の妙壽寺
り松ゑり華うをまれしまし。うれ発引
乃日ゑ後りまちぐへ社文。ちうくちうく
ゑ人ゑ殘くへうをん。嗚呼ゑ和い
京石門の雄俊。威物のくへいへ命まれ。
皆泥華の書肆。うれ是を話五篇
ゑくとのと梓くへし。世ゑ乃ふせもうて
序を予ふ求ゑ。予篇〳〵平ふ斷、

金の文ゑとそて強くいをのがらく拙さ
者を執くゑ。ゑ人ゑ萬物の霊
ゑて五性今くへ備り。うの性善のくり。
うちりふの。分ふ松くゑ。外ゑちく。
まとうれ形ゑの根本。ちぐ父母ゑ者を
ばくゑふちぐもうくへ。百行之源万善之
長ゑれの大畧をまべちりくへいうくゑ
いりくへの篇を侍畧をゑ陽して。ちを
ふの序ちれう。書肆うれぐへ乃需ゑ

奥ばくえん

享和三年癸亥十一月

洛東　入江致身子忠識

於恭敬舎南窓之下

[illegible]

大哉乾元萬物資始乃統天雲行雨施品物流形乾道變化各正性命天與樂實面白有樣哉何をいてうこゝを加へん

是い石田先生易の義傳の辭と引て。都鄙問答の席とうさしたのでいざりました。先生言御説解も多くいざりましたとしば〳〵和尚ほ一ぺんぐらいでゞ。ゞ門と其大体と中とませう。先此大哉といひ乾元ぎイのよういすとやさしのぐ。大小よかまる大でいざりまた女ねゝ彼流女中方の耳さへ

よいかうなは。誠に〳〵大きなとつゝがよいこと。乾元亨利貞の天の
御德と名付さるのでゐる。乾と
いゝは。神道佛道。平等一枚開いない。神道でいゝは神の道
の中。佛道でいゝは佛の道の中。儒道でいゝは儒。の道のこと。
此乾元の天德で世界中が續ひつゝまてゐるゝれこ用ゐ
いゝえねうゝきなものじゃ。陰陽和障して雲が雨龍
乾道變化して。各〳〵樣〳〵。散地をあゝ。一切万物人間い
いゝよりだ。會稽東山河大地幽谷砂石の數よりもまゝ。
其形の形〳〵をのゝ〳〵。其性命を正しうして。天の道
樂をいゝ人すは人の道。養いらう〳〵。萬いかあゝ。已〳〵が

道を盡し。樂いをどりよるえい幻。此し天命を常〳〵と乃
いるい。えをけ人は万物の中じし。るひ天上で五倫五常の天
德が身よ備りてある故人は人の道勤め行なて。神の〳〵
其性命を正しうしゐる。自然と大安樂と天〳〵に天人
下さる。何とんてゝ此うんよ加へん。何とうん。扨〳〵
み雖く實に面白きみ樣うるし。故先生の所はひ人一さ。
序文でゞゝまし。天〳〵此ようよ結構の靈明の。事を
を受得て何不足がゐるぞみ雖いゝ〳〵やゝゝませぬ。
孟子の曰人は已よ貴き物あり。名恐上〳〵樣方〳〵稱賛を
孔子も挑撥も盛嫌も誹〳〵も獵も乞食も大も翁

も疵も攫も擒も慾も明徳にかかりはない。万物一体じや。其の
中でも人へだかりの衆理を備へて。あかりに應じての知恵がある。
此知恵で違ひが多い。まゝ迷へに身を保がたし。今夜此知恵こ
いへば何ぞかわつた物の如く思ふて居る。何にも別の物じや
ない。此まゝあり安らかに見えたり知ります。自由自在な天徳
清らなる名じや。此徳は天地に見らはるる。されども目にハ見へませ
ぬ。じやない。で気のつく動くが何かり。影も形もない。是を
譬へてみれば鏡に物の移る如くなるもので物来るが移る。
去れば孫も殺もなし。物に向かへば移まいともいへずした。
又物来らねば移らうとおもうてもしられるのぞ。

ことじやりでござりまする捨りもせねばしかしねつかまへもせぬことじやぞ
見。知りことも知りともなうり。跡に行儀宜なるものじや。気も紙
思案も分別に合しなしども。しるべなぞなる物のなうさもまへて
居る別にどうも仕ようのないものじや。まあしつ又捕へ所
もないもののちとちへてそれが即今のありのままが見ゆるか。
是又性なるものじや。衆理を備へて万事に應じる柔和が
備りてあるゆへじや。是何者の為するぞや。知るへき
されども月の明るに見ゆる。手に知りまへて居れば
ねうしきの寿をめぐらふて帰止へより外に仕ぬ
貞に天地もなくきの功徳じや。しらふるを能は

本心と知るべしと。はなはだ此理が明らかに覩いあらわれたる。よりて迷ひが多いなれど迷ひなげうち天徳が備りてゆへ凡聞見知の自性が出来る。ソコデ我でなく我をもうしおしい偽てあまたの目で見える。扇じやと世間が心で知る。はしくこの我でなくちゃんと博明てゆへ我一人者に見えすり安せず。とるくと見へ迫ざりのじや。其の見迫ざるゆゑ天の広徳でして居るとは云へども。我をとるくと。ろく人恩愛が迷ひくなくて安せず。此を理をとるとも生じ。美なる死とらへるものがあるくくとそなて居る。恩愛を人を捨てやると。何なる生死をものいはないとせんもの。ソコデ一体和尚の手に我死なへ

せねばどうしても死ぬるとの居る弱虫がいとるゆゑいはるゆゑで。此の嫌いは滅とれど心は滅いるいゑ此嫌も滅とるやうなれど。乾道変化の内なれば実に滅とるでしないで。迷ひさへせるや。此恩愛も福つくり悪いものじやない。直に軽変化の神の恵じや。ゆゑ石船百石船造るも印籠巾着の細工も皆天の恩愛でさすひてあるのじや。世界中で一人我と親しないんぢ。ゑ動くばかりじや

国ならぬ歩みなまりぬあり涙えく親もいとらもないんが氷波ばかり飯焚くばかり実に面白きおりとまるる。何と知てうを見に加へんサア実ぢみ雑い不ばやそれしどう一切安へ嫌い。

迄で今日の御羅いの知き天。きまりなんじゃやうなもの大
キナニトンデ　や先ごろ人と云へば乾元こは天の此堂一面
じゃ此堂の掘の下でしたむこと堂の中でも明と不知ものを
ぞや天窓の上の青い石も空じゃ。此日様の内で廣る石まま
で二百七十万里とゆーいへば。甚よも空じゃ。釋迦も孔
子も。不可思議ーらんてござる歌あるい斗、つまる。大地い何
ものでいりても形地がある。天空でも長崎でし斗まる。
形のない石ばかりも斗ろ。ふるーきじゃ。ちしで
こと何ようも面白しとふてあるいる遠じゃ。斯い天地が
濁切てある。人弓射る矢が。赤色くと唱る。又水の元が二ツ
ある。一ツでい水が這入如天と水とゆうまりてぶりくと泡
羅尼と唱へ〳〵這入。何と能じとりの又。夫でこそ天の
濁ているものを出合点なさりませ大地い天の塊ものり
じゃ。則天の肉じゃ。夫で人い天の種じゃ。去よ。
天地の石を相續をるりのいんじゃ。甚人が天地のるふ
背い。さ鍛が深ひゆ人間が明と何がかしいぬかしい
黒いはぐんぐう秋いぐんせう。何といふも金のうじゃ。金
がなけりゃばぐんもたらぬ。人の雖義もかんばりくく
夫ーん人の道を先ひ夫義。多数孤つさ心中多拔首縊。
さもなくば悲ひ夫雖圓窮りんじ。妻るとを先ひ雖病

業病癩病とこふでに成て。みなを腐らし。げに一天の御刑罰。
道にくらいかたくしなかぬ。浅ましき罪科を作りて遂るが故。
人がいふりへの教へしや外のものに教へいがしぬ一切萬物。
加のまゝくが道乃通り。鶏が鳥のまね(も)せん犬が猫乃
みなかり物まで。もせん。蓋咲花は春さき。朝がおが昼さかず咲
ころもなく。菊は寒に咲く皆天命に順ふ。各其性命
を正しうする其根元は天が続しめ一切の万物と天がわか
してござるなれど此肉眼で見へぬものじやないが。続しいふ
と譬て見ませうなれば薬をせんじるに益気湯の補脾湯
のし痛へ胸悪の薬と調合して煎じるする其湯乃内に

薬の気が残らずにいるなれど目には見へぬ薬も出して籾る
事がみな一々目に見へる。薬の気は茶碗の湯乃内に続て
あるとど目には見へねど。気が有りぞや。そして陳皮
は陳皮の用を勤め甘草は甘草の用を働き合ふ。其性
命を正しう勤めゆへそれぐへの病に應じて又
脾が健固になりくれ腹もるしいぢやまりので天の続
とふすり此虚空の内に天気が満り切てあるゆへ乾元変
化し空即是色明遍照十方世界念仏衆生と見れ
ども拾へ此念仏衆生とは一切万物のことじや天の妙徳が光
明遍照となく照しなへ一切万物各形と見れ

滝なくこの何を稽こそうたまの浪のうつくしすひ夢ふうこん。
茂本せくとるい赤くも天の本里天ゆり天地の姫の拍
内こやどり。屋敷御勉学拝がこし光明遍照十方世界
へ赤ぎ〜〜と稽の花が咲き。栗の石と栗が出来。稽の木と稽が
出来る。其外一切万木みな茂形とゆ〜〜は。春雨のすさてそ
ま〜〜は稽ぢ。うんる者木い姫のがさま〜〜。一切の形
あるものい。其石〜〜をつ〜〜切て宮殿命と云う。奥さ水
と住〜〜みをさ〜〜ぬ人い天と住で天をさ〜〜ぬ大海の奥が
水と心して水とさ〜〜ぬ水。水中と激き回るい鯨がみゆ〜〜ぢや。
鯨いるの羽根ぢや。鳥ゲ虚空を飛行とる舟の羽根と同

じものぢや人い天と心として天をさ〜〜ぬ。ぬ〜〜ぬ〜〜ぢや。天い
無漏の大海ぢや。実とさして大哉とゆ〜〜此乾元の天の服
うゆ。はじさ一切万物ゆる人に海兄弟釋迦も孔子も富士
の山も湖水も百姓も丁人も乞食も獣も禽獸草木
其外江河の鯨類まで皆天の一服で出来さるものぢや。
何と大なる哉ぢやないか。此石理を極める神道儒道佛
道石い近きかゆり孔るを遠きる求む。神石い睫毛儒
石も佛石も睫毛ぢや。石を付て考へて居らるじきせ。道
い天地ゆり先達てゆる人一切万物はとゆと直ゆ〜〜ちい
ちゆんと稽りてある。名〜〜ゆるものい孔ゆう付さるものぢや。

又名がうけまゝ通用ゞ出来ぬ天地こゝ人も歌等じゃ。名
名小迷ゝて雖仮とる。其い迷ひを元てゆる神道儒道佛道
の教へ〳〵こゝ人も神とゝ人も。孔子ゝ付さ名じゃ。為こゝ人
名のゐいたゝ。かゝ〳〵いこゝゐる。今日い結構な天気
て陰ゞゝまん。ゞゝ五先きゝゝ結構な天気
天の石を開く神代な若そめて今な人数ゐ附まてたゞんじ
天地いまゞ開けゞゝ国家若狭と唱てゐるどゝゆゝ。
ゝゝ〳〵藤むこゝい。顔ゞゝ顔ゞゝ義じゃ。又顔も更さ
ぬな慶むこゝいゝゝ盗人ゝ人ゞ屋敷切出るのじゃ
天地の開けぬ先な孔子の中の鶴のこゝ名

悪いゝゝ名のゐいたゝ。為い孔子の為い。誉へ白いゝ名り
ゐい先ゝ〳〵向いた即ち濁もおゞんもまこさ孔子付名
じゃ。名のゐい名。道の安い心ゝ名よゝて心い名の神ゝ。
佛さまの華厳阿含法等般若法華涅槃も孔子付
ゝ名じゃ。ゞゝ佛道ゝ孔子ゝ〳〵ゝ心ゝ名じゃ。三界唯
一心外無別法ゝ。心の外な別な法いゐいと。佛さまの御
説なさまこと
顔もとゞゝ佛の名と名ゞ我心なゞたゞのゝ名
心の外な何ゞゐゞ。顔さ人ゝ名けまゞ即心即佛。迷ゝ人元ま
ゞ直な凡佛じゃ。一切種ゝ心のゝ。ゝゝゞ種も大日種も法

釋迦も假繫縛も何よも別のりのじやない。心が大事と
いふのじや。儒道とのよ心のうち。書物に心の事書。濂の先
生儒道といふ。參乎吾道一以貫之と何と貴のじや。外心の
靈明のうち邪妄心が三千世界を貫いてゐるとのうじや。
是則心のうち一切の書物一字外のうじやない。皆心のこと
じや。神道でも。日本紀旧事記抔の記事義其外神秘の
中書物皆神のうち書。書物じや濂の神道といふ心の事
是私よりうてない。神道儒一。天人一致とは心が大事とのこと
の發へ此外よ神ないない。或は三教一致の心と云
引け賣る藤のあいなんしどはじやる根の月を見るなり

大山の藤よ藤も道がいる。どのうちなりと賣りて月をでつ
の月じや。其一つの月を。なくてもなくて樣くとなと付樂しんでゐる。
潮水の月の。田毎の月の。天科の月。武蔵坊の月。こちの妻の涙水
の月。ゆの神の月水淵の月。大の食美の月。小俊田の月。月
を龍猫でこちらを美じやくと唯一つの月をげを拝ゐる。
三十仰ぎて月をうがよい。道師の教よ
月むきて拝でてくる藤。ひの月と月延と紀久入りの
雲。なる月い若ようなりのとまけ出ることは遠ひなりの
此月といふ心のうち。釋迦も孔子も石川又右衛門も獄多も乞食も一切
万物貪欲抔本よるのまで。天の御德の濁りてゐる心のたちへじや。

是は人々は靈明の德ゞ備りてある者と教へ給ふるなり。可惜
身ぢや。夫を教へくれふ三教ばかりぢや。何ぞ外の事ぢや
ないか。心とは我と備りてある道と知るのぢや。心を離れて外の
ないない國の元に歸んにたつり。家のかれ方のあり。身のかれ心なり。
一人食度なれば一國孔と孟に。所地頭樣なれば國中が
濟む。一彩の門の旦那殿の心が大切。上流れば下流れ。
水と濁るは下に流る。上なる人に呵りてがないと。こと
いりのぢや。我まゝ気まゝとしたらば。ホンヽヽ
外ならぬ人なれば要樽と内ゝやる栗のいがのなる
國天下の反靈も人の心一つぢや。心が大切ぢや。日ゝ
に彩に戒ゝ戒ゝ朝夕神佛と祀祥とふれ。心の
味とるのぢや。腹の中に何なれば猫さるのいろいろ。先猫
の用心に肖いせよう。若得て勝して人に雑義とうして
いるとぢや。己と表るのぢや。己に克て我に獲る人
のぢや。又ほんとうのい物のまい我ます。表しく。
ゝゝいて家内中と表面ぢや。ぢや濁るのうち
ねゝ。我ぢうう合点して働く人る。何の役に立ぬぢや。
悪いのい酒多ひ人ぢ。ぢ若を揚るがよい。小人の門に
悪と揚るゆへやうほしい。下雑の役の逆ひ附。ら門を
簡して。其ゝまりよい附に蓋ゝがよい。長者に門ゝに

と。三ヶ条にて成らしじませ。其時の長者殿の親いらんなるものじゃ。何こと〳〵て。代物の出ぬ所ばかり〳〵と云る。又掃そうじ。ぢらんと思へても悪しくて。寄藁よ掃除が出来ぬと云て叱る。そこ〳〵とする。此てらひぞ〳〵はして。人参の方に寄る。今度うろうろと寄藁よせてやとて出しひろう腐出した。〳〵とのじゃ。でゞ合と参えんとすると。親方がふと〳〵して居る。皆心のゆるゝじゃ。此道理も。所詮くの心のゆるゝじゃとて。此道理も。所詮くの心中のことじゃ。何し外のゆるでいない。親方和合がゆる。久の所詮じゃ。仕よいゆるの天上じゃ。所高札と礼拝し

親ゆる兄弟夫婦をはじめ。諸親ゆる者に。〳〵和合で暮れのじゃ何よりもいろしいゆるいべ〳〵。夫婦和合〳〵。釋迦如来が所出なされて。何よりも用がゆる。いゆる孔ゆる様が所ゆるまして。何よりも云ゆるゆるいて。はし〳〵其通りゆるして。らひぞ所ゆる。陸ゆる法教ゆるとゆて。礼いゆる法教ゆるゆる。

一下人ゆるゆるまで是と。何ハ是ひべ〳〵是いゆる人〳〵の心。

解じゃ　心せよ。仕ゆる人のゆるひぞ。我らひゆるに掛りひゆらべ。此世ゆるいゆと云云ゆる。所ゆるゆるゆるゆる。

一主人ある家業ハそれ〴〵其職分に達と出来たるゆへ。御主人
をも大切になさるゆへ主人ハ家来のあるじや。何れも不忠なし
忽ち天下の聖人じや

一家業と申されし勝手なれく。此家業とハ即天命じや。
天乃九星二十八宿其外微塵の下を雑生様まで。悉く
皆家業がござる。何の為に昼夜御回りなさるのかしれぬ。一切
万物を守護なさるが天の御職分。則御家業じや。その
天の御仕業のおかげで。受る者本ハそのかさまで。釈
迦如来ハ仏の道で御説なさるが家業。孔子様ハ天命と
御説なさるが御仕業で則御家業。其人方ハ上に御達なさる

させて下を御治めなさる御職分が御家業。侍ハ侍が家業。
百姓ハ農業が職分じや。丁人ハ丁人が家業。商人ハ商人が
家業。米屋ハ米屋。醫者ハ醫者。茶屋ハ乳と飲が家業。
乞食ハ貰ひありくが職分。それ〴〵家業と申しは職
あるがるく万事其分限なるべからざるの。此方から
ハ欲心に立帰るはずじや。家内の諸道具諸式。私が身分
なるハせねば。屋造り普請家の造り。着物から諸め
から。職分限なるハせねば。私ハ何ほどの徳があつて。此
身にしておるものぞと。能く吟味して見て職分限に
る。是ハ忽ち天地の聖人なるかを思ひ嫌ひのじや。

如中一方みなど小間物屋が繪藏の櫛出してもやれこれとと
出たりのどやるいぞ。者とつくい我心を勝いうこと。や。一万
石に一万石のものどがある。賢人いまの人の師匠の位がある。
殷の紂王。夏の桀王。房の部限よりもこまこう。我藏の
家業に勝り。後之天下に賢人さ。況や。云日本の諸大名
がりをもつ為人へ。何うも無

浪華　八宮齋　輯

徳山人乃志賀うう先生へ。我身の上いうこうの海
一ぱいすうとはこれ無理をいひ無てて人の害になるべこと
ゆえべうこうこうこと無理いせば。漁道いせば。殺生えい
ぜ人い殺さば先答のうをせのが大きう事の中うま
ろうて居る。主人目が明と何ぐらいいのがしいと。朝う
晩まで。うそごうけ。無理ごうけ何といて金の為ばや
金ばうけまばどうまばうう。人と実側しても金として
やらんこうう無う心持でいい為うと為う入りて吟味を

なのじや。去年の火事で焼た梅の木が、今年の
焼株りの枝から芽を出し、不肖な枝でさへ、花が
咲てござる。此衆達は身に不幸があれば、とかく天道を恨る
といふても、其性命を正しく、家業を精出し、信ざ
る。此衆達の手前もいはぬ大きなあやまりしてむかしうするぞ。
此事の違へることよくへは、備前の事とりなりまして
いふては無心をいひ乱ざとくへは、備徳はしらずといふ
ては備はりのたしねがよりはし。雨が降しいかさは物でかり。
風が吹といふては気を病ぬ。天道を恨ぬ工面し、是が無理なる
しのふうど坊といふもののじや

一いつまりを正しき無理といふ物じて人の為になるべきなり。
既分で仕ふれ大なる科人じや。此やうなものは、天道をまよはする
るなし天の操らし御恵あるゝ所くござる。恐ろしいなり
じや。皆銘く心得かでござりまして、扨此天の親元から
人の呼吸を通して、命しぬくなさる。人々は出入の息のを
じやまで皆是天の御功用なる故へ、死ぬるといふ命をとりて
なく長くなるのじや。佛家で是を無量寿と云。孔子
も仁者は寿しと仰られて、天は無心にして万物せしまる
ずれなりで死ぬるといふ。處宜のかへるのじやといふて
ござる是でも合点の悪い御方は、其やうな生道しの

あのおとらが死でもあのが云へるか何じやぢやといふも喰せるかな
ものとそふてござる此方もはなるものじやぞ其れ離るから
かりの妄用で此国に凡人は廣虚空の天から離れてで
ござるのが怪よまうし此なる迷ひがあるまいか
「くらきより暗き道にぞ入ぬべし遥に照せ山の端の月
学問の道他なし其放心を求むるのみと孟子仰りてござれば
迷ひはない体用一源顕微隔なしとらへて心は好離は法。心
は体なれば用なれども心と一躰にして見えざる自由をもる。
一ツ云てこれを喩へ此譬に水が凍れば冷と心が知る是
で心と身と一致にして体用隔なしに離ざるりで知まぬ

縦横にや私人よ己れ去りけてはあしらふぜあれば心がないゆへ
じや是がて怪な縦横はない何ともあるひまりやとござりませ
ぬから難いと何じや従順の中のあさうし則天じや。
是私ならじやあない其ぞ有難いものじやそれども心は結構な
あかじや有難いものじやとく奴親が心で何か有て滞
らうじまゐ何より終よ立つのじやない是で心が一躰体用
一致にして隔のない心を。此合点なさりませ是はさへ子る
けれども此あそうとご〆ぞせゝせぬ何が生ているは
天のおかげて茶のさめてぬるいはおかげで天の和
来空へ帰るのじや是も本来空へ帰るの本来空から

来て知るのようなる。畜いるものじゃない。即今此身心の
まま。慶安法界と同性同根なるゆえ。火へ入れても焼けず
入れても濡れぬ。生れつきの通じ。生れ生れ離れぬ。記憶なくつくづく
犯とたとえたらへば水と海へ入る月の。水へ濡ずるごとく
くつくつ。ぎまの如なる生れ得て天地と共に滅記して影
神と共に吉凶と云る。実へ面白きかりときまりつくし。実へ
だけうりとつくしさりのかつ。実一切捨てし後きの抜うる
ものなる可惜ものじゃ。やどへ信心記して知れて法うう
じまんと一切の用の旦那殿が知るし家内が安楽なる
妻子の森屋一家親類出入方うう知書近付門賣の方う

屋まで。が助るものじゃ。何といかくも後の財宝に落ちて息
なるほどくつて。きりくつい。源にいどくつしくつい。雷源よいどく
しくつい。霧の源にもどくつしくつい。
殺こ。殺どうう。胴張中人世界中の議金を集めて。実
胸。毒用支度明ても書ひもくとたまいまいもで用用
を送の。祈ないものじゃ。雑俵せすやたらねんどじゃ。どく
ぞ。心知りて法らうじませ。巳斗。実之帰るものと。細
と。此身てのまで今日の雑いものを知る。面へ中くうう
えくむくまるものじゃない。天地の間の人いるひ天下じゃう
ぞやくいつてのるじゃいう。どこうそうひ天上でやどうく

と飯喰ふくはにをだけうりいてゐるが。そうひ天とじやうないぞ人人の道甚るのみ。べきやうを勧め彩だけのやうで。世を出世しさのじやう。うろ人を出さのじやうないまへ。流天地いろ論一切万物禽獣草木江河の鱗類虫甲みなるとこ。

皆人だけうりへ御若旁の御姿じやとけうこ用とさまし。

ゐるを保りて出こうじまるせ。みの雑ひるのの天とじやまいる光

此用るを人ぬ天ゐ。悪悪の根元一切万物皆此天うう光明遍

照十方世界こ。出世なさして我くと法助け下さる。攝取不

捨の雑いるのじやないう。先光明くは何ぞ。光明くいんだ。

モウノ光明こうの名に称くてひうり称くやうに光へて

ゐる。いろ光明くるくやうに遍ひいない。甚光明いどこ小あれ。

即此燈火火神の火。光明ツイ火じとうり見ていれ。木葉のみ雑

いるのもこじゃゐる。此火の出不いつくで石と金とおで。

ホツトおだけと光明殿を孫人夫を出て対て今日と助る。

飯と葉るとし火。火燈ようるし。虫と日論様のうゐるじゃ。

冬向是のほうこい附甚を懐へ。夜通くと温めく

是いる人ゐ。ゐりだ。火神悪とゐうこうぬそしと何とも思

ひ火燈でのこどうこうけ。腹る。皆法日様のうゐじゃぞ。

多神ないるじゃ。挑灯の孔いるしど火のれというる加

らぬ。おんまう御悪悪ゐ大きゆ人何くもこうぬ嘩ゐうでゆも

燈さだ。挑灯だうり提ゐるひく。何の役よりのトやゐい濃へ
くまつうり石に踏ひうせうやうゝね。雪踏へ上げて来て
御助けやうる。深く微妙の光明を。ぬ上ぐくで仕ゐつく
ゐるにて消うり笑で消ゝうるし野ぐ行うるごとで
でいたきゐ同ま連ゝうのぐや。枕此光明の帳ゐ。遠て垂く
ゝらゐべなゝ此ゐ行ゐる。光今自ゐ人や親法様の光明
で。世間の人ゐ。パイスウいゝくくまつゐ。自ゐの光明の毛うゐ恩
てゝ行けうゐい蚤い義理張てゐうのぐや。夫ゐ挑灯の礼
ゐ行うゝいてゐるのぐや。若い衆い衆ゐけ。どう行ゝ繁や。
美居へ法礼やてゐ。女中方。銀の箸や級者の級付まへ
ぞ。一向ゆゝ燈さだ挑灯だ行うゝ。ふゝ行ゝさげてあるく。ど
ゝ踏ゐぶろ中ゝ知ゐあぐゐゐぐや。水りどこゝ出る
ぞ。戸を抜きゐ水り光明。ホキヤアト　阿弥陀様の法恩さま
のゐゐぐや。則今月の我ゝを御助けやうる。御若衆の御
袋多袴ゐいゐぐや。若方ゝ此を色とまてれば成法方ゐ美
換ゐ行さゐ腹行て。イヤ光明ぐやの法助けのゝ云いるゝ。
我ゐ。い世い換ゐりのでい助ゝ。光明。衆角銀銀てゐゐれぞ。
日ゐ助ゝ。ゝゝ法方ゐ。左換ゐゝゝ。水ゝ出ゝ二三
日此方へ来ゐ行ぐゝぐや。夫でい急ち消て乾ゐゐゝ
ゐ。ゝ大切ゐ此命と助てゐぐゝぐや。ゐいゝと。ゝゝ。夫

でゆうぐ〳〵は合点なされさ
ぬ又あるさ方私共ぐ者て内る綿へ来綿。此ものとい
出来さそ。御ぎ〳〵ぐ〳〵て出来るものじやない。そこ〳〵物よも
ちぐ〳〵けの浅〳〵にもちぐ〳〵。甚深微妙な綿どもこてが
いやり〳〵てゆくてうな。意さを遠げとゆく。天ずりあえ
ぬ〳〵。綿へ〳〵ぶて法助けやまる所姿いちくも天気やりて
天地の妙の脈内よやどり。意義所若労れ。乾る変化
し空那是色。光明遍照十方世界と所ぎ。浴附ぶる
いたいせと者て助ず。布ぶ者ぶ者は布ると者て助ず。天
の恵こでないめいるいよ。まをどゆくこのやうぎ。

御ぎ〳〵ぐ今と出〳〵て変ふさこうゆくりのる綿ら。百姓愚い御ぎ
ぐ作〳〵こうゆくりの小迷ふくた切る功徳と匹しでなれ。
綿るいるゆじや。左百姓流い天命の儀ぐで綿蔵う裏
愚こうの。広世活いるるけ。ぐど。る細工ぐは一ぐこ。出来る
ものじやない。忍ち此跡のやうる不願ぐ綿くと。何がわど
百姓流ぐ幸例〳〵て。綿のふうるとゆくるるる仕やうぐるい。此
又。不願ぐ用ぐ見えるものでは。るけ。ど。ぐ又細工人ある
てや。天ぐ名今来うるぬ。心〳〵いりのる。ど。巻角やくの
綿〳〵出ぐ。ら用ど蔵。御やうて来るこ。法先ぐきまへりる
く。ホ〳〵〳〵我まくるる者るぶり。其肩尾ぐ親る愛嬰き婦嬰

況を後事は一家親うその実のひ備さうのい何とるるくん
で。やーあやうたとる。淑道淑義を捨うこと。佛法難りとる氣
よ。陰陽の氣よりこと不及ぶ生来。天氣濁すて不順しある。何と
恐しいものじやないうを。でこれ天の氣ぐ人の心人の心が天の
氣ちうりを。絶御合点るさきてゆしでも悪い心い物ぬやう
よちさぐよい。一人すても善ちりとるい。則五穀成就の御祈徳
してのるし用じりまぢや其流行ぐの。脇の痛い病ぢ九
よ二三度のもべ此穀のもべ出るじやないうまぢなる。
用の白人時食とるるし氣ぐそく。又不順の年ち。諸者諸
山で陰摩と御祈るるし。五穀成就民安全し養生とる。

雖いものじや。先じやりまし此の若事も天地よこ
とるる不ん考年の御名情ひいない。性い若こ天い若ぐ
御とるぢやりまく。必でも若事い天地ぐ御恢びるる。
小人とりものい其安りけぐないゆ人よ。ちりとでも若りと
きば換の行ようまりく。已ぐ勝ぐ行りと。謀うて
のるものじや。ちでめ見ちりでいりでも。善い祈利
ものじや。大仏世界の邪十とるるじやない。実成仏佛聖
人様方が。背行て御効験うるるのじや。中庸。致中和
天地位萬物育しあり世界と和合とるるりじや。又書
ちり曰若至天地兩順時。若至天地萬物化醸。若至人衆

福来と。最勝王経に曰。由聖教感応人法異名人授星宿
及風雨雷電依時節等と云云。又聖徳を以て神と言ふ人神
のよろしきを以て聖徳盛なれば山川海渓までも其澤に浴す
じとなり。況や又教草本禽獸を扱ひて扱やと此等
い。聖人神佛の御法文じや。一人滅と云ふ虚空法界
を引導をるとなり。風雨時を順ひ。又日の風十日の雨万
物繁化豊し。草木花咲実のり。又教よく生来。衆人
和合し。国治り家齊ひ。身体くさいなる病
患ば切るなりじや。色と酒とを捨て見ずやうなら。酒のまるなり
酒と酒とは入るとは別の酒なる。清妙なるめでや。不
染し解脱もの。じや。まじやうなり。扨一切人なる法
掃も世法なるとしば邪の乾柿とをるなる供の内なり大に
いなりとなるなり皆邪なる教なり。紅羅義をるぞ色もる
供だりまやうなる若い流女中方。年寄ても。不浄なる流
さく。雨より出する物り雨より溜るなり。家より不審なる。
むしろ。舜王禹王湯王のと。聖人の御代なり。九年の洪
水。八年の旱魃。五穀稔と失ひ其外種く様々の変り
なく。万民大なるしむる孔子の御在世なり。国々豊饒
あり。大神御若勇なるし。此教もの。そなる
ものじや。変がこし。大魔なるありてい。その中なる結構る御

藥がみをくしも利用がない。聖人世に出給ひて天下を治め給へ
ども拂ふ聖人の教へよりあがるへきよりの勝まを用
りして。まつ〳〵さき合のやうに合ふり互に國と國とを
遠へ〳〵ハアスウ〳〵とそしをを使事の毒うよりてかる。雅義を
ものじやなしと天の御名代の聖人神佛の御名にあまる
やうなるこもの天が宮をあるよ御制敗をるる。又天の
御仕業いたをるものじやどうもとあと出ずうぞうと風を吹
しずう。大雷と鳴りしてがらり〳〵ぴかりぴかりと鳴も
発も一時にさきぶつ〳〵ずう。燒殺〳〵ずう。世界中の山も川
も家も里も一度にゆをぐらりずう。其のあげくに大雅やう盛
雅やうで切ずう寒ずう。まづ其うへ傷寒疫病時病ずう
るものでをでろ〳〵と御慈悲のあまり。天の様がひ孫〳〵
をなるるのじやそしでかとくれ毎年〳〵が北む聖人者なる
い海に居て死を者をたくさんとうふ〳〵。小人のるる天変地妖の
天命と恐るる。日〳〵よ驚よ。驚〳〵老〳〵の御慈悲をがいを
御恵をよりて助ずうてあるとまつ〳〵。後〳〵其ずを
小人に何をもちゐぬ。ちゐとでも子が無にるるとおこう〳〵
もるが仕事じやなりぬ。ぬ別悪い
ゆへ世なりのじや。此若天明七年未の六月白米を外
弐百文十。其外すは病人多〳〵。孤つきもるるかさ。其外

心ゆくまで撫育遊。ホヽ〳〵の都鳥。どこへでもひもぢいく
い出来ぬりのじやぢやうんく。ぢまこと。えるのい。我子を
調伏して居るのじや。子よ。ゆりてこんこうとしのんづへて御
らうじませ
板光〳〵八金星の御徳。猫爺いこへて出来さものぞ其
外此きせるでも。史弾も金槌も。鋤鍬庖丁。鋏長刀金銀錫
まぐも其根えいどへて出来こそ。色も紙治屋こう出さと
やうに覚てゐる。いろはも紙入錦物師紙治屋の細工じやそん
こう山こう抜出しこもうたこうこうある。其抜出した金ぐりい
天命の賦与でこうこう抜出したこうこうついよ埋めよ彩こは

法しるい其抜出した山こへ。徳やうこう濃が埋で長さのあやぞ
ぞくこも乾道変化し。雲紗雨施こ天の金星天ぐり大地
の母の胎内よ宿り光明遍照金銀珊瑚錫杖こり山
と抜がホギやこと長き法ひ。猫爺こいい鋤鍬こり。女中
ぢいり矛一の槍こりけ社。物載庖丁。縫針鋏針。
数仕社。社よ陸こ家のこちこ。まよ陸こ女の子と教でござる。
まぐ其よ示。こき筆こまでこいく。御服けやさる法若男
の御姿じやうこく考こさこ罰がにこるぞ。けこあ根こ
こい。刑鉄の用ここぐ。流産ここるのぢやここ。
色男ぢい面白いよじや。考へこ御らうしませ。此金色がつこち

随身のものじゃ。人の骸も肉ばかりでは立まりがない。此体が金気じゃ。此体といふものがないと餡ばかりせんのやうに付合ふてどふも仕やうのないものじゃ。ひよつと芝居の人形をつかふやうに心で大勢押合ふてする。岩瓶しのやうにきますりて仕舞まではい。それで陰々ならぬ。ソコデ天の金星天降りて人の骸に這入りてござるゆへ、此身が健固でおる。何ぼ難いものじゃといふても、此身は土じゃによりて、金気を以て土をしまる。則勝じゃ。己に克て礼に復るを仁といふ。即ち人の心じゃ。其己が土じゃによりて、金の気に淘まして土を金としてやりますと金と金ある。是が金気のしまりは故是を金神の

ざらしを削りし差別ないは此世界ぞしいハ下の世界の人は逆さまにあるく中ぞうにたつて居るぞ。れども天下の世界ぞしれ。此界のもの皆逆様に歩行するやうにおもふて、いかなあがり落ちはせまいかと案じてゐる。天地を一元気といふ旋転の行で天がりとおてゐる。奇妙ふしぎなものじゃ。此徳を仏家で金剛といふ。般若ともいふ。中庸に今夫天斯昭々之多及其無窮也日月星辰繫焉万物覆焉今夫地一撮土之多及其広厚載華嶽而不重振河海而不洩万物載焉と云ふ。神道で高天原ともいふ。天の浮橋とも云ふ。此虚空天の御力で毎日毎夜陰陽御相談なされて一切万物がまるまる出来るといふものじゃ。此大

地の功徳を地蔵菩薩といふ。此の外に地蔵経よく出たり。又法華経でも菩薩品抜出る。扨此菩薩は娑婆世界御ぶ[illegible]ん[illegible]ある。其内一人日久[illegible]ん[illegible]で大きな法験きなさいと[illegible]ふ[illegible]ぢやそれわど大勢御なうみ[illegible]も御事を[illegible]なぜ[illegible]は御つまりあひれ天ぢや用ふ人数とんぢやふ人の御ふ達とい。万物すくとるのじやうこと人の御ふの御[illegible]さえんやうほいぶつくゝ教えん[illegible]ぢやとゝ[illegible]一切万物皆天の御恵[illegible]ぢやとゝ[illegible]一粒。麦一つぶも無素[illegible]ものゝ[illegible]とゝ[illegible]ぢやゝ米い一切万物の御既即今一命と即りそのゝ[illegible]ゆゝ米ゝは世の根ぢやとゝ[illegible]命の根眼和合と

欠

MISSING

助うてゐる命の根。稲荷大明神と観音とを稲と稲
てゐる親父様じゃ。いかりの天社大明神といふ教のくるぶ紙
と思てごさるらしいかじゃ。あまり近くて見付さうな慶
えもない徳と云ふまぢやゆゑ付てゆらうじませ稲荷
の社大明神様と。恵の御神剣面が出来ましたるゆ
相此世界の割合が山三十の海一分田ちらく。山が三分海が
十分。田地田畑が一分じやと備様が御説なさしたと。其一分
の田地の間さらく家があぢ其ちがいこだりの家に住む
人のあるは先大きな二十分の海うしろの数多の鱗類鱗でも
鱗でも悪く結命と捨て人の用ゑ人と助ける。鱗の鱗の

ぬみてく命ととして、人の用をえんとたとけるる。鱗ハ鱗の助みて。命と捨て人を助るる其外数を限りなしいはび上しいは河の鮮類。とど〳〵皆命と捨て人の用をえんを助ける。この外瀬〳〵海〳〵の猟漁。網網うち鱗寒海奥川奥者市。蔵倉蔵人助るるゆゑ喰てたとう。双方共を助て通し。皆老海〳〵助けてゞざる。其外てまゞり。馬力。ちゞら。牛。貝。あつび貝の助みてく目と明らうう〳〵精ゑどまし。風雅と去。慶労を補い。滋養を活人。其ちあみてく命と捨て人をたとける。其外の貝類甲類の功能ハ一〳〵ふ風表しがたし。此余ちあうさ方で御吟味ゑさしません

楓魚目〳〵は物の命と捨てハと助るる。廣ち魚遠。又のり類でハ海草。青海のり水泉寺。若海布。若ちのりハ膚の系猫ゑは喰ちえ耳ゞ落ゑゞ。皆助みてく人と助る。漁陸。そ人。ゑ岡。蛍和布。其外の後ちえ布ハへのり〳〵助て人の用ゑ人と助る。ゑ〳〵ハい何ゑもちゑ助めてえ。ゞ色いえ一番ゑけまゞ助ちゑ。強〳〵助てく人と助る。一切捨ち物。ゑい悪〳〵皆命と捨る。何ゑ命と捨るうしゞらつゞうり乃人のゑゞや。色で人いゑ人天上ちい人ゑを強ハ知りゑ。ゑ一ませ何のゑ小世中ゑ一切万物ゑ命と捨て御世話ゑゑ。ゑゞ人えゑりのゞ。ゑ人ゑ海りて考へてはらうしませゑ人ゑ

人は人の為に勤めをしてくれるで皆命を捨て御奉公。
無理いへうそついうて。なる男しうて。盗をもつて。我き
ものとなるしやないどうぞよいのみして中りくれと
云て。乾道変化し。光明遍照。実即是色。海と成り。山と
成り。雨と成り風と成り。御世話をなる。皆色皆色阿
弥陀佛の御若労の御姿ト。此度大の御恩とも云ぬ
いへい可惜事しや
扨又三分の山うち出る木草茅草。名鳥畜類なるもの一切
天の御光明で。万物成して。乾道変化し。各性命と心
已くが道と勤めり。其命を捨て強い強て鉄炮を打
命と捨て殺と刺殺いは殺物。武具馬具
人の用と勤め。膳い膳でなるしぬ米となりて人の命
を助け。悪にもうけど猪い猪で肉と刺殺。膳い米となり
人の命と助ける。蕎い蕎で弓鉄炮で打殺し。鳥い米喰
なる。毛い米となる。人の用と勤め人と助け其外狐狸
猪。鹿熊猿もの山猫なるまで皆一こと助みて命
と捨て人の用なる。此外鳥と限りもない鉄しい獣物類
つどく功徳い云事しでなる。方て御有難ものと
てはならじまを
扨者なれ其通り拝いるとせの聡らへど其ものとせ分

結びして切側さまに成り道具成り人を動け。人の用
動き拵本いひの本の物のごく。命と捨て人と動け。樓の本を
拵成り。人の用と動き。板の広い桶成り。箱揚げ成り
て人の用と動き。人を動け。其外本の根柴薪。拵高家の
動きごく。皆さま〳〵の物みごく人を動け用と動き。人て
松の本限り。ゑんてい。御基が知しぬ。一切まの本の其根えら
ごく〳〵て出来さりのごと。乾道変化〳〵天の本星天
り。貴殿御若男拵さん光明遍照と成ひ。月星と
ありたごと〳〵成り。家成り。浮る成り。重箱成り。
飯櫃成り。其外寸〳〵成り。きて本成り。

大桶小桶柄杓まで。拵そに物にしまで。皆色天の御恵
一つとして無まに成りけと一義蓋とそもそもで上いる〳〵物
でもない。又脂でも拵ぬ其の附ゑ物の芽たりやまで。落ひ。
ゑ御助けやすの。味噌と成ふは揚ゑ本芽。麦と落ふ今ゑ
桶芽。米と麦は米吹所芽。番の物切ゑ其那拵芽。皆ゑ
ゑて今日を御助けやする御若男の御安色さ帰ゑでい
孫ゑ一切諸芽薩其一切諸芽引ゑて皆色酒孫色帰此
あごく帰の御一切祝芽りい用。一切諸芽ごい一切万物のごと
ごや阿ゑ〳〵ゑ十方三世帰り御ごやゑ〳〵く一切
万物ゑ悪く阿ゑが海りてゐる。阿ゑいどんな物ごや。何

まだ外の物じやない腹の中の臓腑ぞ。何しろふしぎな物じや
ぞ人の腹の中に山川園池在てないぞ。牛も馬も猿も狸も
腹の中があつてこそ。其外一切万物人間禽獣草木に至迄
森羅万象甲乙丙登氣の腹の中まであつてこそ。阿字に云ふ所
ない此所にあつてこそ云ふと死る。釈迦も孔子も阿字が云ふると
もの云はずに此中なる物にいたも阿字の功用阿字の事なるの。
阿字は異名物じやせう阿弥陀はどんなものじやぞ
天何言哉四時行焉百物生焉天何言哉
「咲花を欲よしむ人へ咲するなるのりしと知し」
其本ときかしてみれば何もないのなるかない予欲無言と

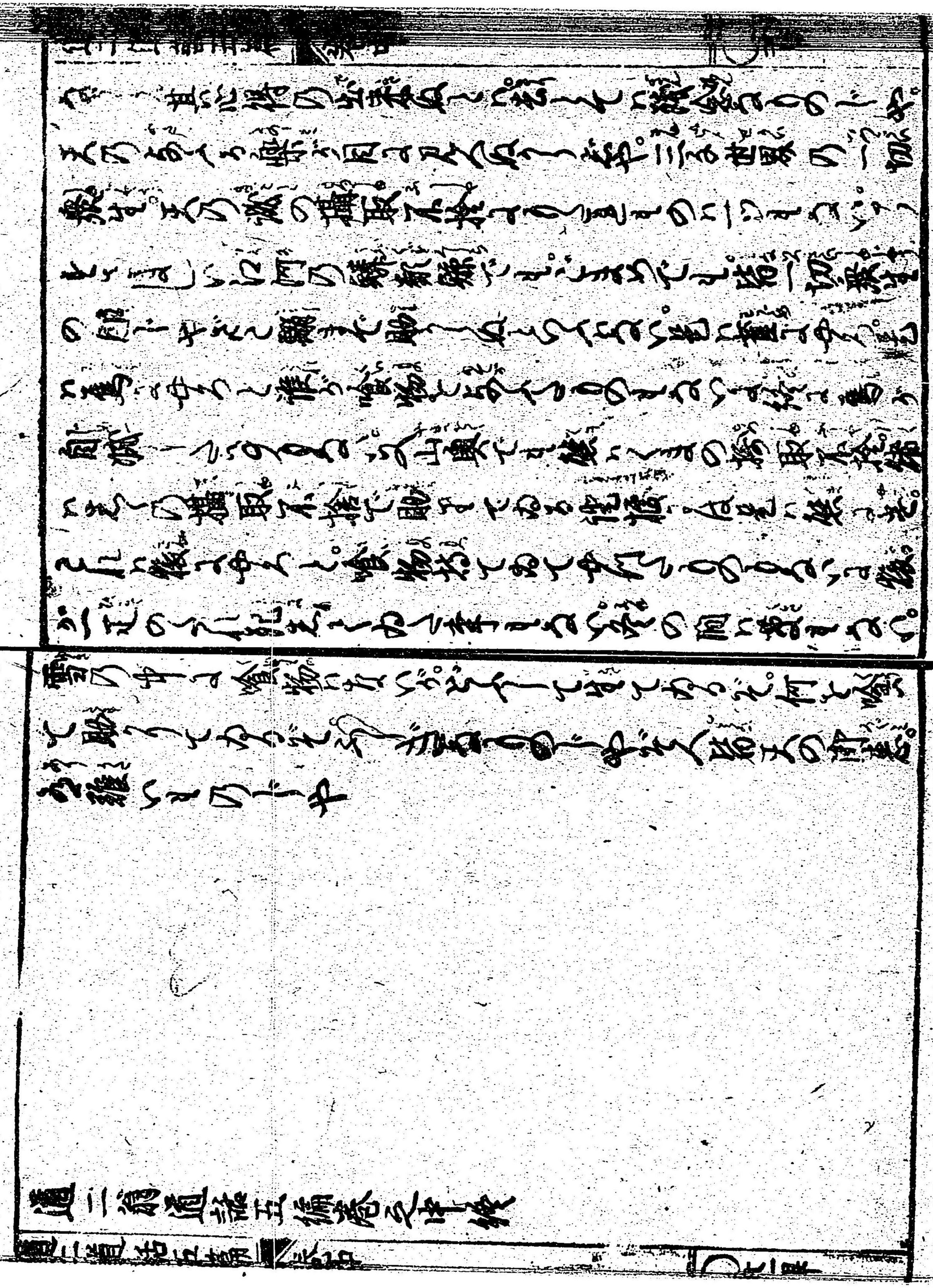
又云ふのでも知れてるのじや。譬へば云ふなら先づ火はあつい。
水はつめたい。云はば先づ水は冷い。のりつと云はば先づ正月
はめでたいのる。月事に死ると云はば先づ死ぬるのに死が嘆
であるよ。人と云へば先づ善人が多いといはゞ先づ
悪人何ぞも云ふに及ばぬ。法華経に止止不須説我法
妙難思と。思案分別を離れて。道は天地に先達て居る
其今日天命に順ひ
「さしあたりのものごとへでも今日くらねさの知らぬ明日の日
明日はまだ来ぬ。て今日の道があるのじや。道とは何ぞで
の余りの端でも今日のことが道じや

法華経の心をさとらば世の中よ事事くさ法と流し
一切妙法なたらざるものもなし。誰が世話せいでも無駄
なる世界中のあるう紀るたらうくかうくかうくなどの嘯ぞ
栗の本に栗の出来るも妙法柿の本に柿の出来るも
妙法柿と出来たい妙柿の出来る法。一天円海皆悉妙
法生と蓮華生と妙法蓮華経の中よ居る人ぞや。天の
妙うう御恵こうさまと大地の法が御諸なうして一切万物地
うう生でありのいない而んまでば。皆天地の御分身じゃ。勿
体ないもどや。紙一枚菓一筋も無未なるものそんなる物
うう。ひうりと身なる隔りて天のうくるたのもそれ実西田

きみ様なる何とぬてうぬとよ加へん。此よる何ぐあるぞ。所代
もなくいなる今のもうる法摂る御代なすもてくぬ未盛の未盛
酒屋い酒屋。諸くの渡世と時さへ出せば大安楽。天のうくる
る楽をもとぬ有難ぐ明るると何ケかしいのぐ時くい結其
和と知くぬう。倹約をようせぬ子曰飯蔬食飲水曲肱
而枕こ楽亦在其中矣。三度くの喰ふい何のるくや蔵さ
へうくまとうくよい嶽なる若るい何のるぞ。暑の人寒の人こ
ぐれぐ天のうくる楽くこ。冥加をもとしいあ雑いくで今日
を暮れば八珍遊りい何のるぞ。雨露に濡まいちをの風をふ
せぐんぐ門りう。玉楼金殿い何のるぞや。茅屋いに何のこも

じや雨露にぬれまいとおもへば雪風と遊んでゐる。春にあるく
まして喜の食物天のあたへる楽を楽しまんのか。海物天への与
る楽を楽しみ西瓜の菓子のし。飯の炊くもなしなきのまで。
其時この物あたふ子どもが何ぞえらんせのあるに。天からのは
たてまいれど世話とする悪にまぜ福は悪に悪なく大悪は悪
の御恵をも勿体なくて涙がこぼるゝ此廣大の御慈悲を勿
体なくてゐる此身。天のあたへる楽をば實に難きみと様なる。
何とおもてはこれに加へん。此道理を御合点なさると。万物には
天の御光明じや。一切天の御恵をも何と是が勿体なく
傍の何きれそふなるものか。神道では此功徳と八百萬の神ま

して勝。一切万物のあたりじや。皆神國の神道なりと經織
とりまはしてる此廣大の御徳と仏國に心得とが。而に乱
まふ一切の物をそまつに滅し。無益にそこなひ破るは天
津罪として。教へ薄情剃生剃選剃許々たる乃畏と
いふて生涯とし寝ねとして食物不足衣類に事欠かる
へ迎ふの結構な家屋敷を構へ。金銀沢山のなうて安倍
にるとしても。何喰ふても味がない。喰へぬものがやまひ腹
寄がへりてくる。難れぬ君で月花の楽しみも。いつの藤
になりつゝも何とうしても食のならしやうし。食を抛
へて根の國底の國に宿替をするものと風雨にうたれてぬ



浪華　八宮齋　稿

西行の歌に、何ものの世はしまでとおもふらんさのみ思ふ
心ぞ思ふ。廣大な慈悲の御恩沢を深く感じ、ひしと
つとめて出家間でもうつぎ小助を援てゆるうつぎ天
の恵まいろいろ天上どや。金銀ひりのどやない。
天のうつる樂をと。恵を酸味の御食し。親念をしめ
佛やかしやをうやまうとも。ぬかるな今い世界と紙のどや。
也へ撮取せうまでめるが。実を雑義なるうがなるどやて。
国舎遠國でいるとろ引しらうがみごんがきはうくる

りのごや。拠処が一人出来るし。其法い義人出来てもうぬ
殺して仕廻人夷狄の法ごや。人の子孫知らぬ人へごや。
焼地の雑子の孫の鶴の子孫ないりの。何で其様
不仁の者ごや。去地の風俗に其人へ去
きば我るが可愛ふ思ふ。どうよくるやうこの厳
人して殺さるものがないらん。何でなやごや
ごさうませぬう。そ人へ不人せ合ん天命うきば命
天道を退く不ないの同ごや天の摂取不捨の衆生ぞ。
喰物ないの殺さうんは。何と痛いりのしやないう。
結ごとい業して助すてあるが慈悲へて出らしませ。

同ご世界の同ご人天の見うれに漁兄弟其い衆生の
喰物が足ぬ人来ぐ殺して仕廻へんはあんまりごやく
ふりのごや。皆此方ぐもの承ぎうり聞てござるの
ごやぞ人。そきとうきば大ぐ殺して三度ぐ喰
其間ぐ乳ぐ飲さの。酒の肴の。餅の。菓子の。唐物
ぞやの。茶喰ごやの。饅ごやの。酒亀ぞやのごめん小麦粉ぞ
う。皆其衆生の恩ぞ」てあるのごやぞへ。ちんと遠
慮ごさがよい。此天地の間の生ものは。皆喰物が命ごや。
此食物ようすぐ。分骨砕身何ごのうぞ。因合遠国
山奥の濁ぐ。山抜谷抜又漁辺浦ぐ活ごの猟人漁夫

諸海川のかせぎと骨折も此食物ばかりてりらやど
山〻谷〻田畑の掛紙と源中と此ろ中と其陰
に業業と振出し中。者〻天命の賦分甚侵と孫して
紛〻邪と祝わび物のまく〻ゞ乙の通り動りてござる。甚
振達の次女ゞ見せこいる。先外一男女のまうらゞ知まし風。
天窓に腥く鰹に甚腰の[illegible]りのと巻て
ゐる。腹物の世話へ〻びたまく〻腹ばまく〻見と
ぎうりの腹てゐる。甚中よいよい娘もあまど。諸腹
のやうるものゞや洗ふと[illegible]いのゞ先打まこくて所蛇の
やうるものと天窓とさしてゐる。食物牛馬の喰中

るものと喰ふて天命を楽んでござる。此義本者倍〻
まし。時分に植付の仕でこざりまし。さゞ娘達のゞ[illegible]笠
で繩り紐。田植の体こそ焼の糸や山の糸へよりてたこと
の〻〻互と。あたまと〻〻と云でゐるパつ附ると中食ゞ
焼飯。色ゞ麦でりと云。栗でもと。ゆりごころ〻て米の穂
ゞや。そゞ田植の小夏〻そまごよいのゞや。常と肉での
喰物い三変〻。桑中〻稗中〻栗中〻で米ばこい一向
喰ふ。牛のゝゝやうる物喰て古間と俵でも親るゝ[illegible]
婦和合。さと。まく〻天のゝ[illegible]ゝる楽と。て笑動てござる。
い減ゝすゝと書物ゞや其間〻ゝ掛合ゝてゞ[illegible]

をいてきる人ハ目をおとしそれの爲ありのれらきまつく。一國
芝居えは釣しらかゝりあるく京や大坂の女中のやうな。
髪結てかゝりのれ世界中よ一歩れありとし雪隠らへ入れ三方
様の蕨義板が二枚ましゝしてある。流義で道へ登踏板ハ
いずれにも其板よ誇てし紙るいは踏こよ外か並べてある
関寺しやまでこそしける衍歴くの書き事しや山家が多
ひのくまう衰殿ましゝ出よなる人。書事が上らくるいは是お目帝
むうりまちやるいは唐土れ大國をやよれて下國が多くひ
登门関よ如何なるか是佛乾屎橛屎篦じや。こそ
げさ法と縄で拙よく漏よえて還く。唐土れまれぬど

倹約じや。まうり見くまでば本る路ハ招ごりの沙汰じや又
狐後頭で外雪隠乃側よ縄が引張てある其縄を腰け
てこねでげる。藤の咽そうりのじやそうハ京大坂乃合天
命しやう是とぶハ京大坂乃女中方と二十日程經
まうずとして見えるさうぞると内のみ雉いるが知まて。
今日が大切よなるる山里の家くは金と銅とと
なる商人れ實出る甚外諸國乃山く谷く浦く湊くの。
所からくと實集め中實問屋へ送り出しし。又問屋から京
へ出し。又大坂へ出し。又大坂から江戸へ出し。中郷方衛の所から
ら忽都るいずしや。一く考へてにいらくりさきせ大田毛

其の所為

炭薪米麦至よいると雖も山門の所と云へば
紙通へ年の車の事なれば河と云へば云へ
諸人播磨の人の汗あぐる。常其衆達を助けくる世
東西うう悪をつくしも。何ぞ世うを国家を
云の。是ぞ世うを運の悪い者。是ぞ世うを換を得る
者何と換して世を云へぬぐる。然れども遠ふく要
さらしない国家云へ。幸いの甘い物。考へてはいる
また此又大悪中の一切無駄せ天人と教さんと云へる。
物く諸国を出来のぐ。の騒動乱亡の人数が

ぎりに近に敵馬の山つうく。播磨の海嘯。減同山の
出り。西国海水の海地震。大なる仕業じゃ。けまを三を世
駆うう月を月は嶺を暗物が出来夫うう陽四と吹出り流を
出て仕出ふて出が雑家を
月ぢゃうるのでの人の数
拾てみるのじゃ。大地も出
流れ」通りで其道命の清りう出来ると変と思れ。
此二色の帰るいつ人。たと人が墨一家の「と」すさんの行の音
ちょうく。抜でも何の拾でも帰るとぐん。くる「と」と
強うく来るものが引うう。強をくてどこぞぐい

ぢんと濃けてたまふ。歯ぐいの雑毒なるなどと強で助る。世間の御恵こそ思ふなれど其下に歯ぐきて不毒の弘法としてる人は世間の人の恵の弘法の弘法なるうる乱ざる人じゃよりも有縁無縁法界万霊の回向も必にきれとせすやるもぬのじゃ。此弘法、うづ見人勝い不じゃその外心中弘法前後廣も乞食も癖人もうれ迷ひ雑歯い皆此方どもの弘法にえてこざるのじゃぞえ。

るるじゃそのくのよ見人
概のへ一ちの田地うち出る歟
歟ぬまもまぐ其仏徳廣
其一二を拳ていまぐ。先馬の歟ち方。中くん間の乃ぶ不
よあるじ一生勤ろて治浪くい一強ちるじ食物い
人の講ひよちぬ若の糧のとんゆるりの喰て正
月の元日ちと一月の数へと楽くこそ。一年中ぢん
くくいたゆう勤ろてゆる。其外ち休ひ一生ぐ
る女房ねぐ。無云の仏。朝ちう晩まで重荷と脇屋
てちくへ退屈さんこちくへ退屈らるる。既痛腹痛で心
ねぐ悪ひ日もちくんさんど。屋敷清らしい歟ちじ歟ち馬
部屋ときれく寄。つひど歟ちくんぐく
ちぢじ酒のまじ一月芝居見ん物ちくへ来ちなく一生

勧めて〳〵勧め配を配んでも。又は配と副まして去数
り。彼の清まんてん の他と毎日いくらと勧る業と
ある福門う悪いとうるうるい所配で孫〳〵きのりあ
とうい事もきく又同じ吊ひせいでも遣てくるのもるい
せうつの小馬の幽霊ぐ出さ沙汰もるいもも馬ぐうう
の事〳〵やるいぞ人此勧めをと人はしてえさぐるい若るの
勧ひ〳〵や。けうこいりの〳〵や。所厳様の所家馬ぐ虎の
皮の鞍霞猩〳〵緋のかざり。若〳〵愛様ひ〳〵も若
るうる心いこいいの〳〵〳〵紘鬼馬ぐ書付て素ゐどんて
もるのあるどるせうこいもり。イヒヒと接拝しで紘

鬼馬も塩ふしうりこうるぐ〳〵イヒヒと接拝して浦山しい
こも和ひ〳〵こうこうで国媚編〳〵心もるいい兵天命の我
家業と大事〳〵〳〵勧めるぐ〳〵ひうう。和ひ〳〵しい物〳〵やそ人
又牛の勧め方も其通り。何ようるるのいるへうるもも
一生張張ひ。此を段一を〳〵ふしぐ武法方ぐめ門をうるこ
ち牛い三百月生〳〵〳〵愛ほ〳〵〳〵いてぐるサア其三
百月牛ぐ売〳〵う人〳〵牛い我牙を売て其牙の
代と人をて人を助け牛い一猪も売いせぬ。ふとした一
生妻妻妻の行。博乗ぎ〳〵ひ酒場ひ物見んぶつ
るをさ〳〵ひ此人日の家業と大事〳〵〳〵と一日仏庵と

耕しこゝろをつくし。其日〳〵の天命に順ひ。轍牛部屋
の費捨も厭せば。人より先に立て行着ぐるひでむか
しから同じ衣裳着せきし。きせいでも不足いふ人なき
るは食物も人げん乃攝になりぬ草乃實なりのゝ物
喰てよい不い人になりへとるものと流し。冬の雜水(?)ぐ
足耕し冥加に叶ふ善し方じや。やまけて薪いは京都の
東寺。朝れどふかう伏見御道ある羽御道大津道等薪
を持く京通ひ此御道にも日圓はらゆく山坂乃難
不あるご若労いふもせし甲斐をもせし肩筋は爛ますん
うれ血と泥の海を不へ東の長柄うけて髪の毛天も極

冬の雪の中もいとはず毎日〳〵の得意廻り家〳〵の飯
酒屋へ這入れば馬士衆だんなり其向きに荷を付てやり
で。表に出て門しまり番馬士衆は友達と酒とのことあひ
うぞう〳〵膝入までくまで逆ふれぐされつまじく一年の知
こ事のあるよあり、さ無膳に入てまじまり。さき廻す。
牛は何れも追及らるゝまじし。無理にもあらば一言の
口答へもせば大きな耻として應くに出るあんなれ
德く詠めてゐらうじまいと流行ことばをしつて見て居
らぬ物でやござりませぬ一生が間其通りに勤めて
〳〵勤めて死でから又皮を剥るゝ蹄の皮は〳〵阿

勝れり。菩提と煩悩と、善と悪と、いづれか勝れるものと。何と悪いなれば、牛は牛、牛は牛なり。足くり功徳が知れて、此牛は、阿弥陀如来御者の乃御姿ぞや。どうぞこれを見て、ご覧ぐさまの一天四海皆帰妙法と、此妙の一字より、乾道変化、光明遍照十方世界と、行ひ入れ、一切衆生が此牛、此まま即心成仏してゐる。仏でもなんでもなりが口を出して、何といふのも金のすきやくと生死と二つを孫にして、いる見を捨てて仕回へい配、さらふのい色即是空生さ、とふのが空即是色廻廻、こゝ迄ハ廻さまり別に心ハない。

既に時も既に刻より外に心ハない。此肉身を捨せずして直に天の光明なるゆゑ、一天四海皆帰妙法となり。是ゆゑ仏引等信ずるゆゑ、信ずるゆゑ助かるゝ。まこと助かるゝ人ハ此肉の中と、煩悩「嫌」て、ならうゝ。ます世界の中に何がゆゑ一切光明て、助かるゝ。ゆゑ遠ハいない

澤庵和尚の歌

ものさき荷と運ぶ牛の小車の跡ごとぬれるなみだ。

色い牛のすがたやないぞ人獄源いのめんせーめーや。

地獄の餓鬼畜生たのとれ。何とふさのーやそ今

即是菩提助けるさまてくまる。南無の中ごどけふり

漢うしと居るなら、吳郷とんでもない。何ぐりくい
ぐりくいなくく、若むい心の暗いうくしやと畜生と
も餓鬼とも云地獄も極楽も皆睦毛じやあまり
近くへ入れ付ざりなく
御其外金幣の數多もつると皆惡くく助うもくくつ殺
多云ふいくのいない皆人のある小命と捨て南助け
なさいくござるなしど其功德とちくぬ殺惡い知た
惡いちくぬ卒名い得るくしは。
喜のくのじや此差別智い得ると仕しは。
なれいまるぬのでやくくぬまの殺くくものを及び絶さ
のじやるしども天の慮る大惡の本と二つ法華中し
ませう先人の内は鳥獣人方い命の惡がこりるぞん。
其惡とちくぬ家まげう餓鬼畜の猫の獨りごるとめ内
さ惡とする服をくく難うくの毛ば惡い知ま」ども惡をちく
ぬくくふのじや。先家の内は魔地中くくを出くくい人
大毒出が這とる。此出い人さ對くていい大毒じや其い毒出を
蚤蚊蝨がさば」向うて。食物としのるが天命の家業蝨
のるさは素とぬくくの人のるが小命の惡其い毒出と制止
てくまる蝨るしが惡ら今の自命の惡でいのまいう此の人毒
の中くを出の殺霜殺猫の殺出のくくい人大毒ぬりまどる

いぢくくこうのと御不審をかけたる。是も又なしがうくゝ
人用のものじや。何の為なること。しかるに膏薬と云てやはり
まん人の助けとなる為じや。天地のなりゆくものはご
ちくゝ為りてもの助なる為なり。「日」てなるは。何と云ても
物じやないと。是なる者て。或者の息つく度ごと暗弱で甚ざ悪
業なる一向親のなるにあらざるで親様様ご因果と観じて
永の悪業と解脱くゝ大なる徳と成なるとてこゝいくらも
ごなる。是ごとくしくゝ膏薬て助うけさのじやどくぐ
も親様様なる御儀のなくゝと息つく度ごと御願て御元
なるんべさのうくゝ此やうなる此ゝくとめけさる因果物くゝ

もるやうなるまゝど。要を説明なるくゝ肝要じや。聖人佛祖
の境界なるまゝど因果いなるまいと。世界なれば天地とくゝもる慶死
して心の欲もるなるに後へども矩と論じの地獄なる別なる
因果なる滞る心がなるいくしど今日ん夫分何が合点くゝさ
やうなるまゝど。夏暑ひ息の通なるい油ひうくゝなる解らい此
て。備蔵ごなるくゝ分なる涙をうなるい。脇ごくて遠くなる程日合
ごやくりて仰山なるいぞ。法なるやうなる義用て仕回うごくい
扨此嵐のなるじやて此間なる義而で影なる彩纏と造りて拡
扨ちまく沖やなるに又日程掛りて居る内なる嵐がな
日ごなるのじやぞ人私なる人ごなると天くくと毋に嵐

をしらぬ人を笑ひ申む。何と天道の仕業とは全のれ。
ぬしもゆるこのない様子屋さ物じやござりませぬ又
書物の中よ白魚とは出る虫が濡沾て居る動くい間だの
うこい火淡せがみが出る形い去じやござうり世話やゐく
雀が地水火風と拵て何てにしらんさりのぞ。ちんと不審付
てはらしまを書物も箱よ入墨ぐりうぢやないかく
出りとなんと白魚が濡しいてゐる此鍵も附く吟味せ
ねと。人欲しいと白魚が濡て居うもの草かうも巣うもに
うもも出這りして後すは鍵と喰て去まいとる御用心なさ
まを。又ひきり蚊い何のねじやなるもしだ
なうねめじや。何が日暮い時分よ日が入まよ
外水仕出。内福にんく源んてゐる。何が一日の者邪でどる
く出向ひがござる不人蚊が来て世話やいてござる。ぶうく
毛美換す嘗しやき蚊家の内よ寝てさん居藤が悪さま。
寝冷しさのイヤ腹痛のしく喧しう爽うるじやないとなし
減相な此吹さはしよ内福て寝てたまるりの。秋ぢい蚊
まで毛邪よ雪源へ百食寄りぢやぞや。去しそれきこの
どくなんじやないがんよ蚊屋の内へ這入ちやまいく
のんとございふさ世話なさる。命の去悪とれ去うだ。
紙忌しい蚊めがと腹をえめんさ変腹よてきも人鍵

とさき淡されてす。ゆんだう張の張ケでゆく〳〵て世活
してござる。此ゆうな美実な世活中さがどこにみさりで。
夫でゆう〳〵と奴家の内へこそ〳〵と這入雙中奴僕の
世活ぐるいと。秋口い病人さうけ。こんぞ奴わたきいと世活
ゆうふ出てござるのじゃ。そろ〳〵雪うちうと奴僕の世
仲間ぐいひ合せ。先蕃の方うと世話なさる。十月次のゆく
嬢出〳〵と嬢よりつても蒲園ぐうぶを附合きくすぐ
チラ〳〵出て世活なさる。何しに旅外屋〳〵寄じゃやるいの皆
天乃世光明じゃやど人此奴の用が結構な事になることと
じゃ此奴用とどうしてあるぞとこんば日蕃ゑ出る蝙蝠の
糞でゑるこんすじゃやへい利功な者じゃや。此蝙蝠の糞と
ゆゑ涂して良い。頭の毒にざらく〳〵とさ物が涂る。其
ざらく〳〵ゆのゆうるりのぐ奴の目じゃ。疫病ゆく〳〵
目まに多く出てこんすじゃやさとれが一切なけとばる
ぬ井上ぐじゃやっ蝙蝠の糞ぐいて丸ぞ。愛情伽藍の掃
除の時よ涂ると。儀はして結業屋へ拾て来る。此外風い紀西
と活し。蚤い鍬虫と鼠どこいへ一切出奴きく〳〵悪〳〵皆ゆ
のそ〳〵人の為ぬ出〳〵命と捨て世活なさる。其奴〳〵功
徳のうまりいゆきと。美別智と得ざる角へ悪いさまこと世
悪りの不氏知〳〵ぬしい張まうるりのじゃやどぞ見と覚

て出らるゝしるせ。森羅万象一切万物引ろうめて。皆人だけうの為に命と捨て出助けとする。何と勿神ないなのでいないう。今飲此出茶一盞に何程の功徳が籠てあるぞ神道では八百万の神達仏道でい一切の諸仏諸菩薩の御恵みでなのけ三ば飲まこれ甚大神と脳れて出らるゝしませ先茶の木菩薩。茶園菩薩。茶釜菩薩。水菩薩。樽木菩薩。火菩薩。竈菩薩。炭菩薩。茶碗菩薩。柄菩薩。茶さじ菩薩。湯沸菩薩。耕作菩薩。養蚕菩薩。紡織菩薩。捕回る菩薩。染屋の布さらめと機具菩薩。何程のぞ一〇毛無しがゝ。激さる百味の悪食一やちの御冥加と知ゝらるゝこれ取り此中うる出助けゝ其御

孔一〇〇八幡宮天照大神を引くゝ八さ不が。南無阿弥陀仏南無〇〇八ば一切諸仏諸菩薩が迎てゐる。南無妙法蓮華経とゝへば。十方三世の諸仏。多宝如来と迎てある。神道でい天照皇大神と辞めば。八百万の神〇〇様が迎てゐる。天気年のじめや大晦日や。年賀状さ出せば。猫舌菩薩。茶碗出羅菩薩まで皆出孔が迎てある。さう刷（焼印）とげて御孔中せば。御孔中せば。指さる菩薩も迎てゐる。指さる菩薩まで。出孔中せば。小便田さる菩薩。古便びん菩薩。古鋼ぶきつ。虫掘菩薩までもの出孔が迎てある。雪隠の内さまでふと板菩薩がこざらひが屋の中さ立てせうこれ。百孔出こぐ如来さく

扨ハ人間に成助けやうと。無いりの御恵が深い。一年に一度か二度か三度か。そなた方へ扇風い物を呉。ふく扇風い物を呉。ふく扇風い物を呉。ふく

一いかゝとも已無理とゝいひ無ゞてんの害を為べきものとゝべからざる事

一博奕の類一切禁制之事。尚此外に略之

此頃の儀ゞ人々を勧めしゝいどんりうで。一切の諸佛菩薩八百萬の神達までゝ御迷惑なるのゞやまゞ其上何ぞうまいものゞゝのうこと。何がゝゝいゞ[か]いごう[し]云ひしこと。ゝゝの外と申ふ。其中を知ゝ[ず]ゝ[ば]ゝゝ。さらに道に違ふて慶天の功德を忘て有る。道に迷ふて他を遠きて求む。疑念なるのゞや。覺帝の教に背の義と長と長らんゞ親たるものを人天子ゞ天地の石此外に道いない。天地の石おゝ[ゝ]ゝゝゝ

大学の明徳と明らうとおもふてくれるひと〳〵す親の国の人の心と明らかにする人の五倫命得とれば国を治め家を整へ天下をすかりを理て所流るさしこ聖人のこゝろ
ゞや支を此方の心法先生ゞ合点のこゝろい世ゝ心
と知ゞ〳〵といつゝ進めてゞざる此本心と名づ一ば意心国
我己といつく我を支る我の名いつゝと知る他人を役親
る先分支婦の間も一家親親知者近者まで夫〳〵の名
順し世界と和合〳〵天道ゞ叶く流潮〳〵仕合せもよく能
まゞ〳〵けでゞ涯を安楽ゞ書ひゝ人の生ゞ色ゞの
利益あるまいまゝ先生ゞ本心の知り妻いやうと背移

て世話ゞるのゞや何ゞ親ゞ通とこらへてゞ
ゞるでいるい諸古の聖賢ゞ書ゞの教ゞ私ゞゞや
ゞいゝ人ゞ智つゝゞゞ世ゝにゝ人て換〳〵のゞと変ゞ
生ゞ支と商売ゞ智て稲ゞゞしてゞる人ゞゞゞゞゞゞ
い京や大坂ゞはゞい田舎てゞゞや色ゞ本心と知ゞゞ
ゞやゞゞゞ本心知ゞゞ流の内ゞゞ行状ゞ改ゞ正ゞ法方ゞ
ゞゞゞ一ゞ何ゞ大変のゞゞゞゞゞ国ゞは得ゞ合得ゞゞゞ
ゞゞゞ世間ゞゞゞ合海ゞ親ゞてゞざるのゞゞゞゞゞ地人
欲の深ゞの浅い流心ゞは大体合点ゞてゞゞゞゞ
分勝ゞゞ悪いゞゞゞゞゞゞゞ本心ゞゞゞゞ人欲の流中ゞゞ

此流の子孫遠ひゞ。大きな道を脇と付てゐる。勿体ないすじや。其いせ蒸和心の。心得違ひを慥様すてゝ。なぜの社中も皆なたゝぬぞやの。墓ぐんうろうろすゝて。拝しいものなあるこの。此ゐるも。なぜの社中ゞ用安付ら。まくゝ分数ちこの。先度縛られて。ぜさもゝ。の連中てゐこのぐ。

鎖ゝさまゞくのものゝて。拝ゝくゝ回ることれいたきな数は。なる事じや。道い天乃。神佛聖人の道どうを一人なうゝも。余斗ちゝせゝもりゝいと。先生の肯ゐて。世話なるゝ。教への業じやない。皆せ蒸和心の。智じや。冥加ないすじやゝを。総合点しさがない。此中うるすとゝど

くゝ。ぎりけせいでもたるするいゝ。何なり知らぬ。初心の流中なる。悪いすぢ。ゝりとゝ。中ゝ。ゝ。流れ。ゝ。流れ。南志の。ゝさ。流れ。ゝ。心い悪いすのじやゝ。ゝ。ゝ。

宗教上河先生授

松荷先生道話

紀州藤田先生同

校刊出来仕候間求御覧為御[illegible]

文化元甲子年四月叢行

明誠舎之部

弘所書肆　大阪心齋橋南壹丁目　敦賀屋九兵衛

同　農人橋通谷町　本屋吉兵衛